



URL : <http://88souma.com/>

新四国相馬霊場八十八ヶ所巡り

取手と久寺家と布施弁天

高野山奥の院御廟橋、(御廟橋から聖域です撮影、飲食、喫煙、スマホ禁止)



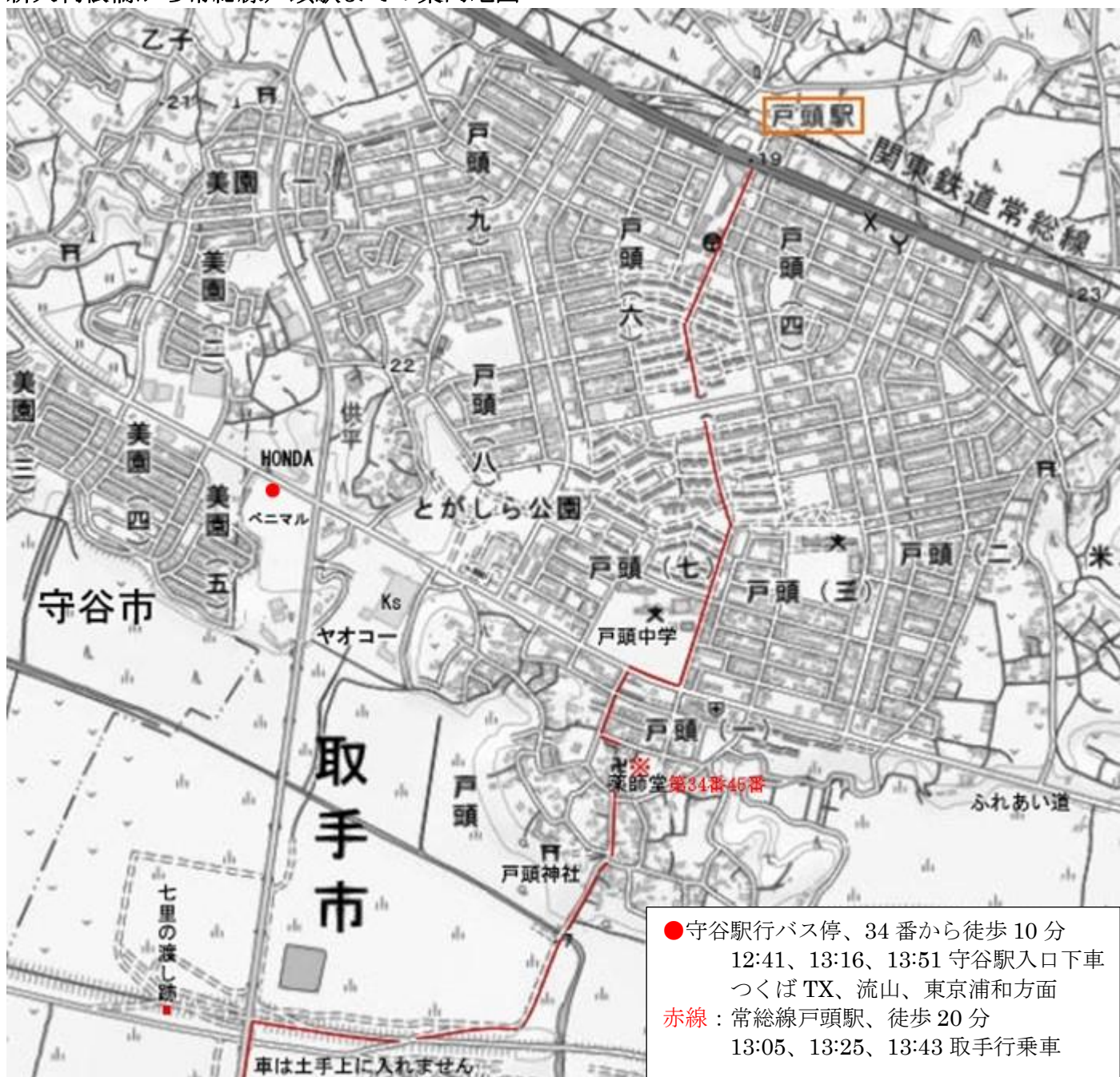
第 26 番南龍寺の山門「薬医門」構造図

あけぼの山農業公園 4月上旬のチューリップ畑
夜明けのオランダ風車とメタセコイア



放浪の画家山下清が滞在して残した我孫子駅絵の駅弁包装紙

新大利根橋から常総線戸頭駅までの案内地図



新四国相馬霊場八十八ヶ所巡り

取手と久寺家と本願寺

JR 常磐線我孫子駅北口集合

「久寺家（くじけ）」地名

茨城県取手市新取手には、千葉県我孫子市久寺家の地名に関わる郷土史が残っています。

桔梗御前の館と言われる平将門の愛妾伝説の地に、岡神社があります。大日山古墳跡地である岡の台地の向い側、新取手5丁目谷地の旧大山には、平将門の臣、久寺豊後守大炊（おおひ）左馬之助主の大山城があり、城主は二人居り豊後守と弟丹後守でした。

二人の城主は、平将門の戦死を聞くや、急いで大山の砦を離れ我孫子の地に逃れ、兄豊後守は、人の住まぬ荒れ山で狐や狸がいたかも知れない、広大な舌状台地の先で、西方を除けば周囲は低湿地に囲まれ、容易には人が近づかぬ土地であった処に居を構えました。

こんな土地柄だから、将門を討った後の残党狩がきびしい中で、久寺兄弟はかくれることができたのでしょう。柏市史改訂増補富勢村誌に次の様にあり。

『伝へ言ふ 平将門の臣久寺家儀元なるものあり。主人没落後、所々方々流浪したる未当地に來り、草庵を作り民の業を習ふ。当時此の辺は草村にて、田畑更に無之、東南北は泥海にして…（中略）…追々野武士共集りて民家四五軒になりき。依て土地を久寺家と称す伝々』とあります。

名前が「久寺家儀元」と武士名の左馬之助との違いがあり、農民へ帰農したとみられます。

また、久寺家という村名が家名であることが判明します。現在久寺豊後家系は大炊と名乗っています。更に、居住地の近くに産土神の鷲神社があります。「おとり」では無く「わし」と呼ばれています。

また、隣接する、箱根マラソンで有名な中央学院大学の鎮守にもなっています。

弟の丹後は野武士となり往來の旅人に追剥（おいはぎ）をしていたという。恐らく生活のための苦しまぎれの所業ではなかったか。しかし丹後はすぐに悔い改め、農業を営んで生計を立て直しました。

弟の丹後は、柴崎村に住み、大井氏を名乗って柴崎東源寺門前に居住し今日に至っています。

我孫子市柴崎の大井家には、将門に関する天慶（てんぎょう）三年（940）の位牌と遺物頸天神（くびてんじん）があると伝わります。

「頸（くび）」は喉（のど）に当たり、頸という漢字は、鶏の長い首を連想するが、頸の字には「陰根（いんこん）」じみた根の深い淫靡（いんび）な伝説を通して、現代でも通じる人生の陰陽の繰り返しを意味しているといえます。首切り＝解雇等は命に関する。

◆ 平将門の首伝説、「頸」

京都四条通西洞院東入ルに、民家に埋もれるように京都神田神宮の小さな祠があり「天慶年間平将門ノ首ヲ晒（さら）した所也」とあります。将門の首は此処七条河原にさらされたが、何か月たっても眼は見開き歯ざしり顔の様だったと云います。

ある歌人が「米かみを射抜ぬくは俵藤太が謀にて」と詠むと、将門の首は笑い突然地面が轟き稲妻が鳴

り、首は「軀（からだ）につけて一戦（いく）させん。俺の胴はどこだ」と言った。声は毎夜響き、ある夜、首は胴体を求め白光を放って東方へ飛び去ったと云う。

東京大手門の首塚や筑土社、神田明神、御首社等将門の首伝説はあちこちに残っています。

新取手の大山城跡地居住の主は「風と雲と虹と」のNHKの当時の取材話をしてくれました、大山にも将門井戸があり今でも門松は飾らないとか鯉のぼりは立っていないとかの風習が残っていたが、現在ではほとんど見られなくなったと言われていました。

打始

第八十四番、明王山宝蔵寺、真言宗豊山派

ご本尊、延命地藏菩薩。

移し寺、香川県高松市の南面山屋島寺

御詠歌、あずさ弓

屋島の宮にもうでつつ

いのりをかけていさむもののみ

観光音禪師は、久寺家の丘は香川県の屋島に似ていると言われ八十四番を宝蔵寺に写しました。

寺伝によると宝蔵寺は元和（げんな）三年（1617）の創建であり元は地藏堂であったといえます。

宝蔵寺は、先に説明しましたが久寺家城跡の一面で城主は久寺家儀元と云われています。

鎌倉時代後期には小金井城の高城氏千葉家配下で我孫子城主、我孫子左衛門但馬守に属していたと云われています。

境内には籠堂（こもり堂）とその奥に大師堂があります。籠堂ではかつて念仏が営まれていました、2005年の巡る会のお遍路では、御詠歌の譜面が飾ら

れていました。

山門前の道を利根川方面に中央学院大学正門有。

久寺家の本願寺山

久寺家台地の北側には利根川が流れ、広大な田畑が広がります。この田畑と河川は土手で仕切られていて「田中遊水池」と呼ばれています。

渡良瀬遊水池は、ご存知の方も多いのですが、河川の増水時に一時的に水量調整の溜池で、昭和35年に造られました。田中遊水池も同様です。

利根川対岸にも有り「稲戸井遊水池」といいます。

田中遊水池が出来る以前には、本願寺沼という葦原の沼が広がり、白鳥や鴨などの水鳥の生息池でした。徳川慶喜や勝海舟等が晩年狩りに来ていた様です。戦後はGHQ等にも知られ、乱獲で激減し白鳥等大型水鳥の姿を見る事が出来なくなったとか。

現在、我孫子市営バス布施ルートの終着停「布施回転広場」は此の田中遊水池の南端に位置しており向かい側の山林が本願寺山になります。

実は此の広場が須賀本願寺跡であり、後に取手青柳本願寺の地へ檀家の成島家とともに引越したと云う口伝(くでん)が富勢町史にあります。

昭和時代迄、此の辺りの子供達は、この広場で板碑や石仏を探して南禅寺に持っていくと、お小遣いになったそうです。

和田沼の雁と勝海舟

雁は食用として江戸時代より使われていた様で、最盛期は明治七年頃、当時雁の飛来地として、和田

沼と岐阜県養老郡の下池共同狩場は有名でした。

場所は柏杓場下から新大利根橋の第2堤防辺りの湖沼の集まりでかなり広かった様子です。

明治中期頃の雁は六十〜七十銭、鴨が四十五銭、鶴が三円で卸していたという。明治15年(1882)、火消大名有馬侯(ありまこう)は一狩場を請負、宮内省西園寺公、徳川慶喜、奥平伯爵を狩猟に招いている。

利根運河開削が始まる頃であり、おそらく勝海舟も狩に来ており、廣瀬誠一郎は勝を案内した様子が伺える。また勝海舟の手記には「利根川には多くのキリツブ(波を打ち消す河川の工事手法のひとつ)が見られた」とあります。

下高井の廣瀬家には、勝海舟書が飾られている。

水の道 サシバの道 より

取手青柳(あおやなぎ)本願寺の元寺須賀本願寺

取手市史社寺編には、応永三年(1396)光明山伝教院本願寺は、浄土宗鎮西派知恩院末了誉聖因(りょうよせいげい)創立とあります。

浄土宗と浄土真宗の歴史的な違いを理解しておかなければならないので解りやすく説明します。

浄土宗は、法然により専修念仏が生まれた、安元元年(1175)比叡山を下りてから、法然念仏が始まる。念仏は既に空也、一遍、源信等によって一般化し全国に広まっていたが、法然は「南無阿弥陀仏」と声高く称えることにより、全ての人々が救われるという自力念仏(じりきねんぶつ)の道でした。

承安五年(1175)上人43歳の春「浄土宗」が開かれました。本山は京都知恩院になります。

更に徳川家康により、芝増上寺を菩提寺とされた為、浄土宗は規模を拡大して現在に至ります。

取手の青柳本願寺は、この浄土宗鎮西派に属する。

法然の跡継ぎが親鸞ですが、浄土真宗を開きます。

京都西本願寺は文永九年(1175)親鸞により本廟とされます。法然の教義との違いは、誰でも極楽浄土に行くことが約束され、また、他力である阿弥陀仏の救いに委ねることで往生できるとする「他力念仏」で浄土真宗(真宗)を開宗しています。

蓮如の布教にて越前国吉崎御坊から広まる浄土宗は、後の真宗大谷派が主流となり、更に慶長七年(1602)に京都山科東本願寺を本山とした歴史へと継がれます。明治以降、特に浄土真宗派に関する歴史は、本願寺によって真実が伏せられ、親鸞の研究などは東洋哲学者梅原猛等によって再考されました。

江戸時代は寺社が規制された時代、だが浄土宗は徳川家との縁により仏閣は増えた様です。

一・応永三年(1396)時代の青柳風景

南北朝の時代、果たして取手青柳に住居を建てて住めるような地形であったのだろうか。

現在でこそ河川整備により居住地となったが、将門の時代からこの辺り一帯での農業は垣内(かい)と)と言って、小石で囲んだ小さな田畑で輪住堤防のようなものを造って営まれる程度であった事が分かっています。井野、台宿、大鹿、寺田、稲といった所がポツンポツン湖沼に浮かんでいるような地勢であったと想像していただいたらよいと思います。

そして目の前には「蘭沼(いぬま)」と香取海が荒涼

と広がっている地形でした。現在より水面の位置が高かったので、泥地だったのではないでしょう。

この様な地に寺社を建てるとは思えません。

二・青柳本願寺を開山した聖罔

聖罔は暦応四年(1341)常陸岩瀬で生誕、父親は佐竹氏の重臣白石義忠(早くに戦死)母によつて佐竹氏の檀那寺である瓜連(うりづら)の常福寺住職了実(りようじつ)、嘉元元年(1303)〜至徳三年(1386)十一月三日、盛蓮社成阿、浄土宗六祖に預けられます。

早くに了実の勧めで各所修学の旅に出されます。

13年間遊行修学し、立派な僧侶になつて帰国しますと、了実(了実)は常福寺を聖罔に後継しますが、それから常福寺に落ち着くのではなく、各所遊行を続け、豊岡水海道に法性寺を創建しました。

足繁く北相馬の横曽根談場に通つて弟子たちに、法然浄土教の本義や法門を説き、白旗派の門弟たちの養成にあたるなどをしていました。

猿島に常繁寺開基、至徳二年(1385)下総の千葉氏胤(うじたね)の招きで教義を説きに向いたとき、氏胤の子徳寿丸は感銘をうけ、これまで信仰してきた真言宗を浄土宗に改宗して聖罔の弟子となります。

聖罔の足跡の一つはこの聖聡(しょうそう、正平21年/貞治5年7月10日(1366/8/16)〜永享12年7月18日(1440/8/15))を大きく育てたことです。白旗派の本義と正脈を説く聖罔と共に、教団の規律を整え、法然上人後の多岐に分散している分派の収れんや教化布教活動に力を入れ、聖罔の力を借りながらも江府(えぶ、江戸市中)貝塚に明徳四年(1393)増上寺を開山し

ました。

聖罔さんの行動エリアを追跡してみますと、常福寺から江府、相模へのぼる道は、官途(公道)常陸からの道は、大体が津頭(つがしら、渡し場)なので、目の前の藺沼(いぬま)を渡つて布施、根戸、手賀沼(渡舟)、大津川、沼南大井(塚崎、大島田)、松戸、下総国府、墨田の須田、大井、沼部、菊名、鎌倉の道を歩いた。布施を除き、古代東海道(鎌倉古道)です。

しかしこの古道は海岸に近くあまり足場が良くなく、聖罔さんも苦労されたと思います。

応永三年(1396)、「茨城県史」井野三輪台を仏縁の地と見て光明山本願寺を創建、「本願寺史」三輪台に上つて地形を相し一寺を建立します。聖罔五十六歳茨城県史では「井野三輪台」と井野地名が記されているが、井野ではなく、古道諏訪街道(戸頭〜豊四季〜流山)筋である布施弁天山と思われる。

この当時、利根川(当時は常陸川や中川)を渡るには、七里ヶ渡ししか無いので、布施弁天山(亀甲山)か上記ルート上の意部山(おぶさん、青山)と考えられる高台でなくてはならない。意部Ⅱ於賦。

三輪台という場所から本願寺の適地を望み、土谷津の山に開基創建を決めたと思われる。

三・本願寺という地名が所在を立証する。

「我孫子市史」資料近世篇Ⅰには、「三十五番字本願寺・三十六番字本願寺外」・「三十七番字本願寺沖」があります。

柏市史の「本願寺川洲」とあるが之は、弁天下・布施下を流れる農業用水路の上にある台地に沿った

湿地帯、これを指しているものであり、「三十五番字本願寺」「三十六番字本願寺外」「三十七番字本願寺沖」は、この台地の裾の縁(へり)をいいます。俗に、川洲のことは洲河、須珂、須賀などといいます。

「柏市史」資料四寛保三年下総国相馬郡布施村流作場新田検地の項157頁外の項に、「本願寺川洲、三ツ井戸方、サイメン沼、和田沼、(中略)此处でいう川洲は、洲河・洲此・須賀という」、《「仮名草子」東海道名所記》東国の俗語に沙の集まりで小高きを須賀と謂う也》

四・「柏市史」資料編富勢村誌152頁の雑項。

口伝。土谷津に往古本願寺てふ一刹あり、嘉永三寅年同じ下総なる青柳村に引き越しけるが、船にて七里ノ渡を渡るとき、本願寺沖にて釜を落としける云々。此の名だたる荒所にて底も得知らぬ所なり。夫より取手の方へ出でけるなり」とあります。

今のところ嘉永三寅年とありますが、嘉永は七年(甲寅)ですが改元しておりまして、安政元年です。恐らくこれは寛永三丙寅(1696年)ひのえとらの聴き違いか、印刷の誤植と思われます。

また、土谷津の飯田氏による口伝では、本願寺が青柳に移る際、檀家でもあった成島家が同行して移住された、という話が付随していました。

五・なぜ、須賀本願寺は取手の井野へ移ったのか

本願寺住職が布施から青柳に寺移りをした背景、これは開基時から教義布教乃至は僧籍者の念仏道場的な目的で創建された寺であったため、地域村民と

の親密度も浅く、稀薄で、寺と住民の間に馴染まないものがあつたのは否めないと思います。

一方、川向うの青柳村は農業基盤の整備が進み、人口が増えはじめ、在地共同体側に沸々と、弔祭などを司る寺院を求める声があがり、同時に徳川家康の重鎮として名高い本多作左衛門への思慕・追善供養を期待する声望と共に、檀越の環境も整いつつあり、こうした村民の気運を小耳にはさんだ住職が心機一転、新天地での本願寺中興を決意したのではないかと思います。

六・須賀本願寺という記録

寛永九壬申(みずのえ)年(1632)：

芝増上寺の末寺帳には「須賀本願寺」とある。

青柳本願寺に寺移りから6年経っているが、檀越(だんおつ)はまだ固まっていない。須賀本願寺の方は青柳本願寺の中興が成ってから処理する考えなのか。慶長元年本多作左衛門が亡くなった際、「寛政重修諸家譜」には遺骸を青柳本願寺に埋葬と記しているが、本当に本願寺に埋葬したのか、であればなぜ御墓山の墳墓が必要だったのか。

本多作左衛門の死去から158年後に編纂された寛政譜は、「慶長元年(1596)7月16日井野において死す。享年六十八。法名高分。其の地青柳本願寺に葬る。」と記しているが、青柳本願寺の在寺そのものが文献ではつきりするのは、寛永11年(1634)の伊奈検地による「青柳本願寺」の屋敷無、田畑百二十五畝十三歩の領有記録です。(「取手市史」近世史料編「青柳検地統計表 895 頁引用」)

寛永三年(1626)丙寅の口碑《土谷津と久寺家の境に字本願寺という処がある。

口碑(こうひ、言い伝え)に古本願寺跡だと言われている、今の本願寺山であり、此処には井戸があつて、真夏でも水涸れしない。皆は上人井戸と呼んでいる：・》と、《土谷津に往古本願寺という古利があつた。

住職は寛永三丙寅年、下総青柳村へ引越したが、舟で七里ノ渡をわたる時、釜を落としたそうな：・》などの口碑によつて、これまで応永三年開山とされてきた青柳本願寺説は、見事に覆されることになる。

この史料のおかげで、少なくとも寛永三年以前、取手に、本願寺が無かつたことがはっきりした。

この時の寺移りの住職は誰かですが、「取手市史」が十八世直誓(真誓)を青柳本願寺八世直誓とし、すると、歴代十一世萬誓が一世ということになります。布施本願寺は一世了誓から十一世萬誓(青柳本願寺一世)寺移りまで(寛永三年)230年の在寺。青柳本願寺は、十一世萬誓青柳本願寺から現住職まで285年の歳月が経過しています。

さらに、寛永九年(1632)増上寺了学編纂の「浄土宗増上寺末寺帳」から、下総須賀本願寺の記述が発見され、下総青柳本願寺の記述がないことが判明しました。

これで寛永九年時点での青柳本願寺はないことが裏付けられました。また「寛政譜」に記す「作左衛門青柳本願寺に埋葬」の記述は誤りであることが文献の上で裏付けられました。

作左衛門は青柳に浄土宗寺が無いがために自らの

墳塋(ふんえい、墓)を作らざるを得なかつた。

H氏の講演より

土谷津(つちやつ)の七社と金精様

中尾平左衛門門前の道の突き当たりに森がある。

今宮大杵(杉)大神、

大杉大明神は、茨城県稲敷市阿波にある大社。

通称は「あんばさま」古名は大杉明神。旧社格は郷社。関東東利根川沿いに分布する大杉神社の総本社です。大己貴命、少彦名命の二柱を仁治二年(1241)に京都の今宮神社から勧請し合祀した為、利根川国誌では「今宮大杉大明神」と呼んでいます。

日枝神社、宝永三丙戌年九月、村衆中にて建立された。全国的には通称名を「山王さん」と呼ばれる。

間、浅間神社とされます。富士山信仰。

三峯神社、埼玉県秩父市三峰にある神社。旧県社拝殿の手前には珍しい三ツ鳥居がある。狼を守護神とし、狛犬の代わりに狼の像が鎮座している。

天満宮、菅原道真を祭神としています。

山王大権現、山王権現は日枝山の山岳信仰と神道、天台宗が融合した神仏習合の神です。天台宗の鎮守神。日吉権現、日吉山王権現とも呼ばれていました。

香取大神、下総国一宮。茨城県鹿嶋市の鹿島神宮、神栖市の息栖(いきす)神社とともに東国三社の一社。宮中の四方拝で遙拝(ようはい)される一社です。

「東国三社巡り」というバスツアーは現在も春期だけあるそうです。伊勢参拝の関東版とでも云うのか昭和年代までは、大勢の人達が年間通して、鹿島

神宮、香取大社、神栖神社を巡拝された様でした。
道祖神、路傍の神です。

集落の境や村の中心、村内と村外の境界や道の辻、三叉路などに主に石碑や石像の形態で祀られる神、村の守り神、子孫繁栄、近世では旅や交通安全の神として信仰されています。

馬刀神石像、大正2年、詳細不明。

金精様、性崇拜の一種で、男根に似た自然木や自然石を神体として信仰する金精神(こんせいじん)の通称。金勢、金生とも記される。東北地方で顕著に聞かれる名称ですが、金・石・木製の陽物を神体として祀る形態は、関東地方をはじめ各地にみられます。

男根だが女性にとっては重要素となる出産、子孫継続と繁栄に関わり家系問題に関わる。

ことに栃木県日光市と群馬県片品村境にある金精峠(こんせいとうげ)は金精権現に由来するものとしてよく知られています。

男女の縁結び、出産、婦人病などに効験があるとされており、木製の陽物などを奉納して祈願する。

豊穰祈願の対象としてとらえられがちだが、本来は災厄除けという役割を果たしていたと考えられる。石仏に「石上大明神」と記されています。

奈良県天理市布留町にある石上神宮(いそのかみじんぐう)系列の別名です。石上神宮は、畿内二十二社の中七社(大和国)の一社。旧社格は官幣大社(かんぺいたいしや)で日本において官(朝廷、国)から幣帛(へいはく)といはく、神道において神前に捧げるものを総じた名称です。もともとは布地を表した語で、麻などの織物が貴重品として供えられました)ないし幣帛料を支

弁(しべん、支払)される神社です。

内神(うちがみ)、九州南部などで、本家の屋敷内に祭る神。関東地方北部では氏神(うじがみ)と呼びます。

第八十五番、土谷津の飛龍山圓性寺(空寺)、

真言宗豊山派。

江戸時代は流山の西円寺の門徒でした。

ご本尊、不動明王。**移し寺**、香川県五剣山八栗寺。

御詠歌、ぼんのうを胸の智火(ちか)か、護摩火(ごまび)にて

八栗をば 修行者ならでたれかしるべき

本堂裏手の小山に清水観音の祠、右に妙見様の祠があり、更にその下に六地藏が並んでいます。

寺の裏手の道路沿いには土谷津の豪農の家が並ぶ。取手にも「谷地田」というかつての湿田を呼ぶ場所が多かったが、谷津やつ、やちとは、入り江で谷の底の部分を使い、かつて水利の悪い時代に谷津は水田の条件に適して利用されていました。

地名の**土谷津**とは、「土」と言う字は「土」と「」を重ねたもので、この地に十一の谷津があったので「土谷津」と云われるようになります。

円性寺の住居は千葉県柏市布施 2278 ですが、道路向かい側左側の一面は千葉県我孫子市布施 2341 になります、更に我孫子市布施の先の住居は、柏市布施となり土谷津の地区住所は布施という地名が、柏市と我孫子市に複雑に織重なっています。

居住家一軒毎に我孫子市と柏市に分裂している実状が土谷津です。

「老桜 ハイカー来たりて 散らす華」
華やかな布施弁天の櫻に比べて、円性寺境内の櫻

は、老木でひっそりとたたずんでいる、私達が来るのを知っていたのか老木は桜の花弁を散らして迎えてくれました。

境内には、雪月庵嘯花(せつげつあん しょうか)と「ろうそく屋彦兵衛」の句碑があります。

ろうそく屋彦兵衛

あけぼの山公園には染井吉野櫻が咲き、4月始めは大勢の花見客で賑わいます。此の台地の北端に、小林一茶の大きな句碑があります。

「米蒔も 罪ぞよ鶏も け会うぞよ 一茶」

文化九年(1812)2月12日、流山秋元双樹同行

小鳥が地面をつついて居るので 一茶は米を蒔いてあげたところが 鶏が来て小鳥を蹴散らして 米を独占始めるが、鶏は仲間同士の喧嘩となる、小さな鳥達は喧嘩する鶏を横目に、再び米を啄む光景を見て思うのでした。武家社会の世相を批判、人間社会の構図も似たようなものだ。

享和三年(1803)、小林一茶の『享和句帖』11月13日条に「嘯花、布施・ろうそく屋彦兵衛」と記載されています。

平成になって蘇る江戸時代相馬郡布施の俳人嘯花。雪月庵嘯花は宝暦11年(1761)、下総国相馬郡布施村土谷坪(現我孫子市布施)の飯田勘平家次男として生まれ、同坪の二代目中尾平左衛門(酒造家)の養子となり、後に分家して彦兵衛と名乗りました。

俳句を常陸国河内郡若柴宿(龍ヶ崎)、風篁庵(ふうこうあん)野口乱竿(らんかん)に習いましたが師の死後、江戸の麦秋(?)より俳諧秘伝を享和三年(1803)に

授けられました。同年、小林一茶の『享和句帖』11月13日条に、「嘯花、布施・ろうそく屋彦兵衛」と記載されています。嘯花は、柏・我孫子市域に名の残された数少ない俳人の一人です。

晩年、彦兵衛こと中尾彦兵衛は、俳名を嘯花といい、書齋であつた庵名により雪月庵嘯花と、言われていました。

雪月庵嘯花は「雪月庵」にて子供に読み書きを教えたりにしていましたが、農民であり ろうそく屋という商いも営んでいたようです、更に「講」の世話人等々と土谷坪に貢献していました。

嘉永二年(1849)亡、享年八十九。

柏市布施の土谷津に中尾富久造さんというお宅(目印は円性寺)があります。この家の祖先が八兵衛さんで、布施村で初めて酒造りをした家だったそうです。昔は酒蔵もあつたようですが、今は酒造り関係の施設はありません。八兵衛は、貞享元年(1684)現在の神戸市北区山田町の生まれで、宝暦二年(1762)に69歳で亡くなっています。

中尾家の初代である八兵衛は、布施弁天を初めて亀甲山に祀った布施村名主の後藤善右衛門家からの養子でした。1741年という五十代で起業したのでしょうか。

そして、忽然とこの八兵衛の名前が消えてしまうのですが、それは、富勢村誌によれば、八兵衛と同じ名前の代官がいたので、畏れ多いので八兵衛を改名して平左衛門と名乗るようになったと言われています。その時期は宝暦二年(1762)前後と言われ、以降中尾家は平左衛門と代々名乗るようになりました。

三代目平左衛門(1745～1809)の時に、酒の銘柄「谷風」が、相撲関係者からのクレームにより、売れ行きに影響し、享和三年(1803)に酒造米高百石分の酒造株を現我孫子市中里の中野家(中野治房東大教授)に譲渡して、酒造りをやめてしまいました。

中尾平左衛門家の反対側に中尾嘯花の家(ろうそく屋彦兵衛があつたそうです。土谷津の円性寺の門を背にすると正面の道は50m程先で右にカーブしています)が、車がやつと通れるような直進路があります、この路の右側は柏市で左側は我孫子市です、この左側に中尾彦兵衛家の母屋右側に書院があつたようですが今はありません。

二代目中尾平左衛門家に飯田家から養子に入り、酒造りの経理等の仕事をしていた平弥が分家して彦兵衛と名乗りました、小林一茶と交流があつた俳人、ろうそく屋彦兵衛なのです、だが、蠟燭を売っていたのかは不明であり、彦兵衛は土谷坪(土谷津)に於いては、子供達には筆子役として庵を解放し、人々へは土谷坪の総代としての役務を遂行し果たし慕われていたそうです。 「富勢町史」より

中尾嘯花句集「いほりのちり」より

「いほりのちり」を漢字で書くと「庵の塵芥」です。嘯花の句の一部を紹介します。

初東風や 大土器の うへを掃く

「読み」はつこちや おおかわらげの うえをふく

初東風…新年初めて東方から吹く春風

いく度も 掃た(はいた)師走の あくたかな

(あくた＝茶、塵、自作の俳句を自ら言う)

はちやはちやと 仰げバ高し 藤の花
(ほちやほちや、ふつくらと可愛らしい)

御百度も ひざくり毛也 競馬(くらべうま)

我孫子の子の神権現奉納の句

「ひざくり毛」は歩く旅、競馬は京都賀茂別雷神社で端午の節句に行われた神事。

庚申の 夜を月花に 明けにけり

庚申待ちは徹夜で行われる習俗(しゅうぞく)。

円性寺の庚申塔群の中に句碑があり、文化元年六月土谷坪講中三十四人と刻まれている。

柳すずし 千とせの底の 河名艸

布施弁天壺千年記念の句?。

(河名艸…河名草…古来より尊ばれる草木、沙羅や榊など。)

木々の間に 紅龍の眼や 冬の月 最勝閣。

布施弁天の楼門の扁額。

筑波根や 尾花の色を 空に持

筑波根…紫峰とも呼ばれ、一面すすきの向こうに筑波山が見える。

菊添へて 泡もりくれた 八か哉

八か…八日。爛酒を九月九日の重陽の節句に飲むと病気になるという習慣、菊の酒。

鴨の背に 朝日かりぬ さくら川

土浦の桜川は妻「たへ」か「えひ」さんの実家近くでした。

『いほりのちり』は百姓である嘯花自身が残した畢生(ひっせい)の句集であります。

また、書店では販売致しておりません。我孫子市の図書館をご利用頂くとよいでしょう。

第二十六番、富勢荒屋敷の竹林山文殊院南龍寺、

〔ご本尊〕 大日如来。浄土宗。

〔移し寺〕 高知県室戸市の龍頭山金剛頂寺。

〔御詠歌〕 往生に望みをかくる極楽は

月のかたむく西寺の空

大師堂はもと観音堂でした。また阿弥陀堂がある。元和元年(1615)寂蓮社尊誉霊哲上人による開山。

元禄12年の後藤家文書によれば正保4年(1647)の創建で寛文9年(1669)にここに移るとある、移転元は不明です。

境内は広く寺子屋が経営されていましたが、明治5年に学制が施行され各地に小学校が設けられたるに到り、明治6年南龍寺に「天真学校」が、根戸東陽寺に根戸小学校が開校されました。翌年天真学校は布施小学校と改称され、明治33年両校は合併して富勢尋常小学校となりました。

薬医門、取手市稲、我孫子市相島新田にもある。

南龍寺の門を薬医門と言います、江戸時代以降の寺門は質素な建築様式が多く、柴又七福神巡りではよく見受けられます。水戸一高の正門内に残されている、水戸城薬医門が有名です。

屋根を支える柱が梁部で中心からずらして支えられているのが特徴です。

敵が射る矢を防ぐ門で「矢喰門」とも記した時代があります。両脇の小門は常に開け放ち、病人が何時でも屋敷内に入れるよう配慮したそうです。

諏訪古道、「富勢商店街通り」と言っていました。

南龍寺門前の道を諏訪街道、鰻道とも云います

流山く豊四季く松ヶ崎く宿連寺く布施く守谷の古道。うなぎ街道、なま(鮮魚)街道と言われた。

富勢商店街通りは、諏訪道に沿って南龍寺より右脇小道を富勢西小学校方面に進みます、更に県道7号を横切り須賀神社、宿連寺湧水池、松崎へ、豊四季の諏訪宮が諏訪道の発祥となった神宮です。

更に流山へと続き、江戸川端の「矢河原(やつから)の渡し」で諏訪道は終わります。

この諏訪道を奈良の都に通じた古代東海道と云われておりましたが、近年我孫子市湖北の発掘調査により、七道中路古東海道は、鎌倉く市川く柏く湖北く布佐く竜ヶ崎を経ていたようで外されました。

しかし、諏訪道も奈良時代から、蝦夷征討への戦略道で古道であることは間違えありません。

尚「七里ヶ渡し」も諏訪道の一部とされています。

富勢(とみせ)と布施

柏市では布施河岸の歴史は古く渡し場は平安時代からありました。柏という地名の発祥においても柏市の北に位置する布施の河岸場(かしば)からと言う説もあるのですが確定には至っておりません。

他にも柏名の説があり以下の通りです。

国鉄柏駅が誕生した頃は、現在の東武野田線の豊四季から柏駅にかけて民家の少ない柏の木の多い丘陵地でした、その丘陵地は柏の葉のような地形で豊四季を中心に十余二(とよふた)から根戸迄の広範囲に丘陵が点在していたという説。

他に、慶応2年(1866)人口数百人の小さな村落で

「柏村の長全寺」という寺名と地名の記載がありました、今も毎年行われている、送り大師の東葛印旛霊場大師講(鎌ヶ谷市郷土資料館)の文中にあります。

明治22年、柏村は戸張村・篠籠田村・松ヶ崎村・高田村等と合併して千代田村となります。

明治29年、常磐線の開通に伴い「柏」駅として開業をはじめます。柏の葉なのか柏村から柏駅としたのかはハッキリしませんが、当時の地名である「千代田」という駅名にはしなかったようです。

その後、大正15年、柏駅前の発展により千代田町は柏町へ改名され、昭和29年9月、柏町は土村・田中村・小金町と合併して市制を施行し東葛市となりました。しかし小金町を松戸に編入して3ヶ月後に東葛市は柏市に改名されました。

柏市は昭和40年代から急発展し、現在では常磐線沿線最大の市となり「北の渋谷」と云われる程までに急高度成長しました。

富勢は、富勢小学校などの施設に名が残っていますが、消え去ってしまった地名が富勢(とみせ)です。

富勢には、流山から布施弁天、戸頭、守谷、谷田部を経由して筑波へ通じる平安時代以前の古い街道が通り、利根川で渡る「七里ヶ渡し」があり宿場として栄えました、今でもこの街道筋には「富勢商店街」と名称だけが残っています。

明治時代の町村合併によって名付けられた富勢は昭和29年に布施になりました。

諏訪道はうなぎ街道(鮮魚街道)とも云われ、布施河岸の鰻を生きたまま、陸路で流山を経由して江戸

に運んでいました。

富勢という漢字の読みですが、富勢は「ふせ」とも読めます、事実、ふせ村と呼ばれていました。

布施の地名は、布施村は古代からの下総から常陸へ出る官道の要に当り、平安時代初期、布施屋が設けられ村名となったと言います、格式を誇り村民の財力もありました。

布施屋とは奈良・平安時代に僧侶の慈善事業によって営まれた宿泊所で旅行や運搬者の無料の宿坊でした。

【参考資料】行基の活動「昆陽(こや)の布施屋」について。行基と最澄より

行基年譜に布施屋というものが出てまいります。布施屋というのは、これは申すまでもないことだと思いますが、いろんな人々にものを施す、布施ということばの「布」は布ですから、本来は布を与えることだったのでしょうか。布施屋というのは、貧しい人に、あるいは生活に困っている人々にいろんなものを、まあ布もあるでしょうし、食べるもののない人には食べるもの。みなさんの合力でもって集めて施しをする。

これを行基さんは奈良時代におやりになりました。その場所が布施屋であり布施屋の起源なのです。

行基は全国に布施屋を広めました、和歌山市の布施屋は「ほしや」と呼び、渡し場がありました。

第六十八番、布施弁天、紅龍山松光院東海寺。

【ご本尊】 弁財天と聖観世音菩薩。

【移し寺】 香川県観音寺市の七宝山神恵(じんね)院。

【御詠歌】 笛の音も松吹く風も琴ひくも

歌うも舞うも法のこえこえ

本堂は亀甲山(かめのこうざん)にあり、御前立ちの弁財天は八臂弁天と呼ばれ、8本の手にいろいろな道具を持って祀られています。

本堂の造りの特徴として、密教の原理に従い内陣と外陣を分けた構造として、外陣の天井には狩野探船の龍図、内陣には本堂の建設に協力した九十八藩の大名の家紋が画かれています。享保2年(1717)。

奥の厨司の中の弁財天は巳年にのみ開帳されます。

寺伝によると、平城天皇の御代大同二年(812)七月七日、紅竜が現われ一夜にして島をつくったが、夜な夜な島の一角から光を発するので里人怪しみ恐れ祠を建て祀った。弘仁十四年(823)、弘法大師巡錫の折、靈威を感じ、伽藍を建立し、嵯峨天皇の勅願を請い山号寺名を定めたという伝説です。

八臂弁財天坐像、布施弁天の弁財天は60年に一度の御開帳であり、平素は御前立を拜むことになります。

読み…「はつぴ(肩の意味)べんざいてん ざぞう」

弁才天の原語は「サラスヴァティー」、聖なる河を表わすサンスクリット語ですが、元来、古代インドの河神です、河の流れる音からの連想により音楽神とされ、福德神、学芸神など幅広い性格を有しているといえます。

像容は八臂像と二臂像の2つに大別されます。

八臂像は『金光明最勝王經』『大弁才天女品』によるもので、8本の手には弓、矢、矛(ほこ)、鉄輪、繖索(けんさく、縄)などを持ち、次のような功德があります。

一、知恵が付く 二、財福を得る 三、名声を得る 四、病気を除く 五、邪悪を排す 六、豊かな物心を持つ 七、思いやる心を育てる 八、幸せをつかむことが出来る。

一方、琵琶を奏する形の像は、密教で用いる両界曼荼羅のうちの胎藏曼荼羅中にその姿を見せている。ただし、胎藏曼荼羅中に見える同像は、後世に日本で広く信仰された女神像ではなく、菩薩形の像であり、仏教においては、妙音菩薩(みょうおんぼさつ)と同一視されることがあります。

江の島弁天(日本三大弁財天とする説もある)、浅草寺、布施、秦野福寿を関東四大弁天といえます。

日本三大弁財天は、琵琶湖竹生島の宝厳寺、広島県宮島の大願寺、奈良県天川村の天河大弁財天社。

紅龍(こうりゅう)の伝説

平将門は良持と紅龍との間に生まれた子という伝説があります。紅龍はこの地の岩窟に住んでいたそうです、紅龍は竜であつて人の姿はかりそめでした、将門は布施弁天に必勝祈願をしたが承平年間の兵乱の際に将門によって東海寺を焼いてしまいました。後に源經基が再興したと伝わっています。

史実を探ると、江戸時代に布施村の名主を勤めていた後藤家にのこされた文書には、延宝二年(1674)布施村の又右衛門が村人を集め、亀の甲山に藁葺き

小社を造り、弁財天を祀るとあります。

今も弁天様のある丘は、亀の甲の形をしています。

延宝七年の「御林法度帳」に「亀甲山(かめのこうざん)」の名が出ています。

当時は、今の伽藍のような堂塔等がかね備わったものでなく小さな祠があっただけで、これを信仰しお参りするの、弁天様近くの寺山地区だけのようでした。

元禄12年(1699)、布施村古谷にあった、東海寺から留守居が派遣され、管理にあたっていました。宝永二年(1705)には東海寺が亀甲山に移転し、以後、布施弁天と東海寺は一体となって寺運展開の歩みを続けることになったのですが、このころ本堂建立の計画が生れ、宝永六年にはじめて江戸出開帳を行って資金の調達を得、不足分は村人の入草金の寄進などをあて享保元年(1716)田舎には稀な本堂が建立されました。 当山三つ折りより

楼門、

「最勝閣」文化7年(810)の創建で総ケヤキ入母屋造り瓦葺。従来のアーチ型無柱から二柱を立て通用部分を三分しました、これは勅願所であったので正使と副使の通路を分けたもの。布施の木工の棟梁藤十郎の作といわれています。2階の内部中央には須弥壇を設け釈迦如来を祀っています。

布施弁天の楼門には、仏教で帝釈天に仕える護法神四天王が祀られ参拝者を迎えてくれます。

仏教の世界観における須弥山の中腹にある四天王天の四方に住んで、仏教を守護する四神です。

東方の持国天、青色の身に甲冑と種々の天衣(てんね)を着け、左手は腕を伸ばして刀を執(とり)、右手は曲げて宝珠(ほうしゅ)を持つものもあります。

南方の増長天、赤肉色の身に甲冑と種々の天衣を着け、右手に剣を持ち、左手を腰にあてた姿をして憤怒相(ふんぬそう)で表されます。

西方の広目天、赤か黄色の身に甲冑を着け、手に三叉戟(さんさげき)、筆、索、剣、鉾などを持つ。

北方の多聞天、毘沙門天と同天、甲冑を身に着け、憤怒相をし、左手に宝塔を捧げ、右手に宝棒または鉾を執(とり)、二夜叉、邪鬼の上に座る。

鐘楼

「からくり伊賀」と呼ばれた谷田部の飯塚伊賀七の作。総ヒノキ入母屋造りの多宝塔で八角形の石積基壇の上に円形の十二柱を立て十二支を彫刻して方位を表しています。伊賀七が残した和時計などを展示している谷田部郷土資料館がつくば市の旧谷田部町にあります。飯塚伊賀七(1762-1836)。

大師堂は本堂後ろにある。境内にはこのほか大日如来堂、聖天堂、虚空蔵菩薩堂、愛染明王堂等があります。

松尾芭蕉の誤伝と麦秋という俳人

「涼しさや 眞帆に眞向の 山なれば 宗舞」

誤伝：松尾芭蕉といわれていた此の句、芭蕉ではないと判明し、柏市教育委員会は訂正しています。

大谷若水筆 柏市布施 眞言宗東海寺の境内。

宗舞の「舞」を「房」と読み、芭蕉の俳名初号「宗

房」と読み誤り芭蕉句碑として誤伝してきたもの。

1979年に井上脩之介氏が「房総の芭蕉句碑、下総篇」(審書房)で指摘しております。更に、柏市教育委員会

が1999年3月に発行した「柏の金石文Ⅱ」の文学碑の項では、この句碑を取り上げてはいるものの、「作者名」を記載せず、後に正式に芭蕉の句を宗舞の句に訂正しました。

芭蕉は我孫子市布佐では鹿島詣で半泊しているが、布施弁天に訪れた記録はありません。

以上、相馬霊場HPへ柏市のI様よりのメールです。
「玉つはき ひるもふてけり 布せこもり」

宝井其角(たからい きかく)

江戸堀江町で、近江国膳所藩御殿医竹下東順の長男として生まれた。延宝年間(1673-1681年)の初めの頃、父親の紹介で松尾芭蕉の門に入り俳諧を学ぶ。はじめ、母方の榎本姓を名乗っていたが、のち自ら宝井と改める。

「闇に寝た 眼をあけぼのの さくらかな」
松曉庵朱明の俳号麦秋(ばくしゅう)

小林一茶の俳友で土谷津に居住していた雪月庵嘯花は麦秋の弟子でもありました。

碑の裏面に記されているように、当地の領主で隠居した本多伯耆守正温公自ら、文化十二年六月に書かれたものであることから、麦秋は田中藩および領主とかなりの関係があったとみられる。本多正温公は明和三年(1766)駿州田中藩、藩主本多正供の長男として生まれ、十二歳で遺領を継いだ。天明二年伯耆守(ほうきのかみ、伯耆国鳥取県米子)に叙せられた。寛政十二年七月田中騒動(詳細不明)の責任を

負って致仕、三十五歳で隠居し天保九年閏四月七三日で亡くなっている。

第六十七番、元富勢の薬師堂。

〔ご本尊〕 薬師如来と大日如来。大日堂と堂脇に文化4年(1807)の相馬霊場石柱があります。

〔移し寺〕 香川県の小松尾山大興寺。

〔御詠歌〕 うえおきし小松尾寺を眺むれば

のりのおしえの風ぞふきぬる

薬師堂は、水生植物園近くの「寺山ふれあい会館」にあったのですが、七里ヶ渡しの水難による救済介抱介護のために、大日堂が既にあった最も近い当地へ移築したものです。

白花蒲公英(たんぽぽ)、

薬師堂の境内始め利根川の土手にかけて、この辺りには自家受粉では花が付かないと云う日本古来種の白花たんぽぽ(別名関東たんぽぽ)があり、桜の開花時期だけ花を見ることが出来ます。

このたんぽぽは風によって数百メートルも群生位置を移動することがあり、近在では佐倉市の佐倉城に群生しており、四国と瀬戸内の島々にも群生地があります。2005年4月には戸頭地区で数本見かけられました。

白花たんぽぽを知っている人がどれほど居るか、日本の自然財産が西洋のたんぽぽによって消えようとしていることは事実です。

七里ヶ渡しと布施河岸

七里ヶ渡しは、布施と対岸の取手市戸頭との間に設けられた利根川の渡し場で元和二年(1616)に江戸幕府が定めた渡場法度法16ヶ所の一つで「七里渡」と記されています。

布施村は渡し場や河岸の設置により交通の要衝として栄え、江戸時代中頃からは関東三弁天と称される布施弁天東海寺の門前町としても賑わいました。

七里ヶ渡しには布施河岸が併設され常陸国、下野国、と南奥州筋の物産や銚子方面の鮮魚などの荷物の陸揚げを扱っていました。

当時、江戸への輸送には船運を利用するのが常で利根川を遡り、関宿から江戸川を通じて江戸へ荷物を運んでいましたが、次第に上流の河床が上昇し荷物の往来が困難となると、布施河岸で荷揚げし陸路で江戸川の加村河岸(流山市)へ運ぶようになりました。陸路の途中に、柏市豊四季に諏訪神社があり「諏訪道」と云われています。

明治23年、利根川と江戸川を結ぶ利根運河が開通すると、布施河岸はその役目を終えますが、昭和30年頃まで渡し場は続けられました。

七里ヶ渡の場所は、明治13年作成の迅速測図原図に示された場所、昭和31年頃の写真や当時の利用者の話にあった場所と時代によって多少の違いがありますが、現在地である水神様の石塔付近とされています。

渡し場跡は、新大利根橋の川面近くに茂る鈴懸の大樹の根元に水神宮が祀られています。

七里ヶ渡しの七里、

江戸時代以降に於いては、武蔵国と下総国の境でもある、千住から七里ヶ渡しまでの距離は丁度七里になります。

しかし、鎌倉時代以前は、鎌倉の七里ヶ浜の場合、大宝律令で「里＝五町＝300歩」と規定されていて、一里を650mだとする時代のため、鎌倉の七里ヶ浜海岸も浜の西端から鶴岡八幡宮まで、せいぜい450位しかないのですが「七里」といいました。

「里」は長い距離であるので、直接計測するのは困難に近かった為、半時(約1時間)歩いた距離を一里と呼んでいた様で距離ではなく時間でした。

人が歩く速度は地形や道路の状態によって変わるので、様々な長さの里、36町里、40町里、48町里などが存在することになるのですが、目的地までの里数だけで所要時間がわかるという利点がありました。

しかし、やはりこれでは混乱を招くということで、豊臣秀吉が36町里(北3927m)に基づく一里塚を導入し、1664年に徳川家康が子の秀忠に命じて全国に敷設させました。

小さな山を造り榎などの木を植え、旅人が一休み出来るように、一里おきに設置した一里塚は全国に配置したといわれます。

七里×4Km＝28Kmというと、千住の水戸街道からの距離に相当します。

なお、七里ヶ渡しの名の起源はハッキリしません。

第三十四番、薬師堂、永蔵寺跡境内。

〔ご本尊〕 薬師如来(薬師瑠璃光如来)、

江戸初期に乙子(おとこ)、県道47号守谷流山線と国道294号の交差点西側)辺りにあった薬師仏を永蔵寺境内に移した説について、永蔵寺は守谷の西林寺の門徒寺で現在の守谷市高野に開山説が有力です。

慶安二年(1649)八月付、徳川家光朱印状に、薬師堂領として朱印地五石を賜わっている。薬師堂本尊の薬師如来は平将門の守り本尊といわれ古いもの。

大師堂由緒書きには、

第45番安永四年観覚光音予州岩屋寺ヨリ移安ス
第34番安永四年観覚光音土州種間寺ヨリ移安ス
とあり、45番は永蔵寺、34番は薬師堂ですが、霊場開山は両札所一緒なので既に同居済です。

従って、薬師堂があった当地へ、年代は不明ですが永蔵寺が移転して来た説が自然と思われます。

明治の頃迄戸頭近隣は相馬郡守谷郷に属していたため西林寺末が多い龍禅寺、長福寺、西光寺等。

〔移し寺〕 高知の本尾山種間寺。

〔ご詠歌〕 世の中にまける五穀の

深き如来の大悲なりけり

守谷市高野は、ジョイフル本田後ろ利根川寄り

打止

第四十五番、

光耀(こうよう)山等覚院永蔵寺跡(えいざうじ、廃寺)、

守谷の西林寺門徒天台宗、隠居寺。

〔ご本尊〕 阿弥陀如来。〔移し寺〕 愛媛の海岸山岩屋寺。

〔ご詠歌〕 大聖の祈る力のげに岩屋

石の中にも極楽である

廃寺永蔵寺は、守谷市西林寺の隠居寺であったが現在は龍禅寺の祈願所となっている。

西林寺は創立時、守谷の高野にあり、48ヶ寺もの門末と二十石の朱印地を有した大寺院でした。

天慶4年(941)守谷の高野に西林寺慈念僧正の開山開基ですが、元禄4年(1691)に現在地に移転しています。理由は不明です。

応和年中(961~964)の創建と云う説もあります。

永蔵寺は檀家を持たなかった為に明治初めの神仏分離令により、衰退し廃寺となりました。

永蔵寺の住職の葬儀には連絡をした訳でもないのに、取手近隣の住職はもとより上野の寛永寺の住職まで参列されたといえます。

大師堂の由緒書きには「安永四年観覚光音予州岩屋寺より移安す。」明治19年焼失の為再建とある。

明治5年(1872)、学制が發布され明治7年1月、永蔵寺に戸頭小学校が開設されましたが現在はありません。利根川土手寄りに戸頭神社がありますが、神社近隣のマンションビル入口前に戸頭小学校跡の案内板が設置されています。

当寺門前の道は、戸頭神社を経て利根川の七里ヶ渡しに至る古道で、かつては宿が二・三軒ありました。戸頭宿は平安時代の頃から栄えていたと思われる。「御所車」なる地名等が残っていました。

更に相馬御厨(みくりや)に属していたという史家もおります。享保19年(1734)の地藏菩薩石像などがある。銀杏の大樹は取手市指定樹木第1号です。

戸頭薬師堂の天台宗紋

三諦星、三台星(さんたいせい)宗紋

上台を空諦、下台の仮諦、中台の中諦の三諦円融(さんたいえんゆう)「三つが溶け合う」といいます。

三台星は、天帝の居所である紫微星(しびせい)の直下にある、天台宗の総本山である、中国の天台山を象徴したものだそうです。

天台宗の根本教義の一つ。

空・仮・中の三つの真理、この世の事物は

すべて実体ではないとする空諦、

すべて縁起によって生じた現象であるとする仮諦、すべては空・仮を超えた絶対的真理であるとする中諦の総称。

三諦は孤立して成立するのではなく、同時に一つの真理として成立する。

菊十六弁と三台星を図案としている「菊輪宝」が天台宗の宗紋として使われていました。天皇家の紋の使用を許されたのは天台宗だけでした。

比叡山延暦寺を建立した天台宗の開祖最澄は、805年病床の桓武天皇を見舞った、以来お互い生涯親交が続き、菊の宗紋を使うようになりました。

三諦章紋、最も一般的に使われた天台宗紋です、土谷津の圓性寺にもあります。



三諦星宗紋



菊輪宝宗紋

日本の伝説、大師講の由来

柳田国生

伝説の上では、空也上人よりもお弘く日本国中を歩き廻って、もつと沢山の清い泉を、村々の住民のために見つけてやった御大師様という人がありました。

大抵の土地ではその御大師様を、高野の弘法大師のことだと思っていました。歴史の弘法大師は十三の歳に、支那で仏法の修業をして帰って来たら、三十年の間に高野山を開き、むつかしい多くの書物を残し、また京都の人のために大切な色々の為事をしていて、そう遠方まで旅行をすることの出来なかった人であります。

こういうえらい方だから、亡くなったと見せて本当はいつまでも国々を巡って修業していられるのであろうと思っていた人も少くはなかったので、こんな伝説が弘く行われたのもありましよう。

高野の大師堂では、毎年四月二十一日の御衣替えに、大師堂の御像の衣を替えて見ると、いつもその一年の間に衣の裾が切れ、泥に汚れていました。それが今でも人に知られずこつそりと、この大師が我々の村を歩いておられる証拠だなどという人もありました。

とにかくに伝説の弘法大師は、どんな田舎の村にでもよく出かけました。その記念として残っている不思議話は、どれもこれも皆似ていますが、中でも数の多いのは今まで水のなかった土地に、美しくまた豊なる清水を与えて行ったという話でありました。東日本の方は大抵は弘法井、または弘法池などといい、九州ではただ御大師様水と呼んでおります。

もとは大師様とばかりいつていたのを、後に大師ならば弘法大師であろうと、思う者が多くなったのであります。

あんまり同じような話が沢山あるので一つだけ今知っている話だけを書いて置きます。皆さんも誰かに聞いて御覧なさい。きつと近くにこういういい伝えがあり、その話にはいつでも女が出てきます。

鳥越村釜清水という部落なども、釜池という清水が村名になる程、今では有名な池になっていますが、元は水がすくなくて、わざわざ手取川まで汲みに行っておりました。土地の旧家の次郎左衛門という人の先祖の婆さまが、親切にその水を大師に進めたお札に、家の前にこの池をこしらえて下されたのであります。そのため今では池の岸には大師堂を建て、水の恩を感謝しているというのであります。

普通は飲み水の十分に得られないような土地に、こういう昔話が数多く伝わっています。

人がいつまでも忘れられない喜びの心を、起さずにはいられなかったからであろうと思います。

良い姥、悪い姥の話は、まるで花咲爺、または舌切り雀などと同じようではありませんか。

布施弁天の大師伝説

昔々、まだ布施弁天のあたり一帯は大きな沼地でした。ある日、大雨が降る中、雷とともに赤い龍が現れ、手に持った土の塊で島を作りました。

それからしばらくして村人の間で、夜になるとその山の東側が怪しく光ると噂になりました。

ある夜、村人の夢に天女が現れ「私は、但馬国朝

来郡（あきこおり）筒江郷（つつえこう）現兵庫県和田山町 から来ました。私を探してお祀りしなさい」と告げました。

夢から覚めた村人が島に行き、おそるおそる光をたどっていくと岩谷の中に三寸ほどの木彫りの弁天像があつたのです。村人はそれを大事に抱え、茅葺の小さな祠を建てて、弁天像を祀りました。

しばらくたつて、弘法大師がその話を聞き、お寄りになった際にその弁天像を見たところ「これは間違ひなく私が、但馬国で願いをかけて彫つた弁財天である」と大驚かれました。

そして弘法大師は、此処にお寺を建て紅龍山（こうりゅうざん）と名付け、村の名前には天女のご利益にあやかり「布施」という名をつけられました。

弘法大師からこの話をお聞きになった嵯峨天皇はとても感動し、お寺に田畑を与え、幾つかの建物を建てて、この寺を天皇家の祈りを捧げる勅願所（ちよくがんしよ）に定められたということです。

相馬霊場の伝説には弘法大師が残していった物件は少ないのですが布施弁天と亀甲山に、此の伝承が伝わっています。

北陸や関東以北に残る弘法大師の偉業は、残念ですが柳田国生のお言葉通りで、大師伝説であり弘法大師は来られていないと結ばれています。

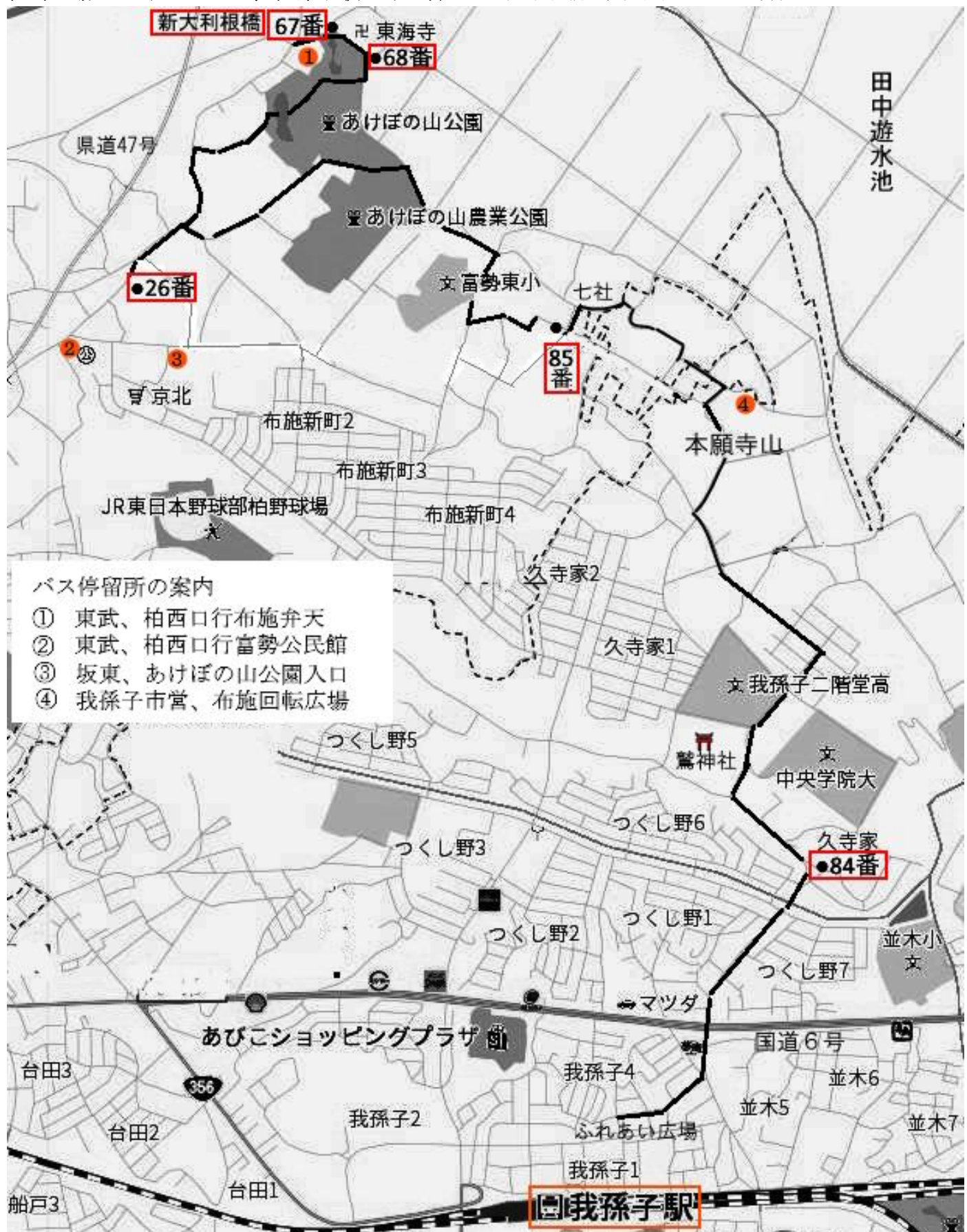
空海二十歳から二十数年間の空白時代は、山岳修行で四国内に伝説を残していますが、謎とされています。

なお、地名の布施は、行基説話の「お布施」が由来元である事「行基の布施屋」をご参照ください。

「須賀本願寺から青柳本願寺へ」年表

新四国相馬霊場八十八ヶ所を巡る会 2015/03/22 布施コース資料

和暦（西暦）	須賀本願寺説、光明山伝教院本願寺、 法然開祖による京都知恩院の末寺でした。	既存説、追加説明
明徳4年 (1393)	千葉氏胤の子「聖聡(しょうそう、了譽聖罔の弟子)」により江府増上寺を開山	江府(えふ)＝江戸の異名。
応永3年 (1396)	了譽聖罔(りょうよしょうげい)は、布施に訪れ、三輪台という所から、土谷津の丘陵地に須賀本願寺の開山を決意する。	聖罔により、井野青柳に光明山本願寺開山。 (取手市史茨城県史共)この時代の青柳は泥地で寺院を建てられるような状況ではない。
応永21年 (1414)	大鹿山弘経寺嘆譽良肇(たんよりょうちょう) 開山、浄土宗鎮西派、知恩院直末、芝増上寺触下。下総結城と飯沼と三弘経寺の一字で徳川家葵紋を寺紋としている。	
応永22年 (1415)	浄土宗第七祖了譽聖罔(三日月上人)、小石川に無量山伝通院寿経寺を開創。 後に、徳川家康の母「於大の方」と「了譽聖罔」の墓所、徳川家の菩提寺となる。	
永禄3年 (1560)	桶狭間の戦、織田信長の天下、天正10年 (1582) 本能寺の変、	須賀神社、天正年間(1573～1592)宿連寺に創建
慶長元年 (1596)	本多作左衛門重次没、本願寺境内の外、井野の台地「御墓山」に埋葬、現陵墓。	誤伝、「寛政譜」では本多重次を存在しない本願寺に埋葬とある。
慶長5年	関が原の戦 (1600)	
慶長7年 (1602)	家康の生母「於大(おだい)の方」死去。翌年、法名「伝通院殿」を院号とし無量山傳通院寿経寺を現在地に移転した。芝増上寺や上野寛永寺とともに「江戸の三霊山」と呼ばれる。	
寛永3年 (1626)	11世拾蓮社萬誉和尚により、須賀本願寺は青柳に引越したと思われる。 柏市史資料編富勢村史 152 雑頁	同行者に檀家成島家が井野に移住された、と飯田氏より拝聴した。 嘉永3年(1850)と記述の間違えがあります。
寛永9年 (1632)	「江戸幕府寺院本末帳集成」が4～5年かけて完成、「飯沼弘経寺」と「下総須賀本願寺」の記載はあるが、青柳本願寺の記載は無い。	
寛永11年 (1634)	伊奈地検「青柳本願寺」の領有記録。	本多重次没後30年を経過した寛永3年に青柳に本願寺が移され改装建立となりました。
明暦元年 (1655)	新願寺を改め、浄土宗鎮西派青柳本願寺末「本泉寺」を開山。 15世閑譽拾萬上人和尚。	現在の取手市吉田の本泉寺。
元禄14年 (1701)	本多家一族17名が「断絶回向」のお詫び、18世真譽上人大和尚応対。	
柏市富勢村史 (富勢村は、 明治22年～ 昭和29年迄 消滅)	字本願寺：土谷地方二当リテ久寺家トノ間二字本願寺ト言フアリ。口碑ニヨレバ、古本願寺アリ。其ノ跡ハ今ノ本願寺山（飯田豊次氏ノ所有）ナラン。此ノ辺モト塚ナド多ク、石片ナド数多アリシガ、今土字ナドニナレバ、殆形ナクナリ、源兵衛氏前坂ノ中段二井アリ。 盛夏トイヘドモ水涸レズ。伝ヘテ本願寺ノ上人井ト（上人名ハ了譽ト言フ、七里渡参照）。此ノ寺後北相馬郡青柳（今井野村ニアリ）ニ移レリ。	
2015年3月 聞き取り話	本願寺山の一部所有者飯田氏の話し 本願寺境内に「上人井戸」（しょうのいど）が、マンションの駐車場に近年まであり使われていた、が埋められてしまったそうです、井戸の縁には沢山の板碑が並んでいたが、一部が南龍寺などに保管されている。本願寺沼の一部も残っていたが、現在は残土の山と化している。	



- ① 東武バス 布施弁天始発： 11:30 発柏駅西口行、朝昼夕の3本運行。
- ② 東武バス 富勢公民館発： 12:27 柏駅西口行、本／2～3時間。
- ③ 坂東交通バス あけぼの山公園入口発： 4本／時間、我孫子駅北口行。弁天から徒歩20分
- ④ 我孫子市営あびバス 富勢東小発： 11:09 我孫子駅行、土谷津まで運行しています、本／2～3時間。